

当事者から見た国際バカロレアの美術教育
小池研二

Visual Arts Education at an IB World School

—The results of interviews of the relevant teachers and students—

Kenji Koike

1 はじめに

国際バカロレア (international baccarorieate 以下 IB) は世界標準の教育プログラムであり、現在世界 140 の国と地域で、4,846 校、日本でも学校教育法 1 条校で 20 校それ以外では 26 校が実施している¹。日本政府は国内における国際バカロレア認定校等 (ディプロマプログラム) を 2018 年までに 200 校に大幅に増加させることを目標 (2013 年 6 月閣議決定, 日本再興戦略-JAPAN is BACK-) にしているが、現状は政府の見込み通り実施校が増加しているとは言い難い。日本再興戦略では、グローバル化等に対応する人材力の強化に関し、グローバル化に対応した教育を牽引する学校群の形成として上記の目標が掲げられている。これらを見てもわかるように IB を語るときには、当然のようにグローバル化という観点から語られることが多い。しかし、今一度、グローバル化等のための人材育成という視点から距離を置き、その理念や内容についてじっくりと考えることは IB の教育を理解する上では必要であろう。筆者はこれまで文献調査や現場の視察等しながら IB の美術教育について考えてきた。そして IB の教育のメリットデメリットを分析し、そのよさを日本の教育、特に美術教育に生かしていくことを研究してきた。一連の研究で、IB のねらい、制度、特徴等多くのことがわかってきた。一方、学習活動を行っている教師や生徒は IB の教育についてどう考えているのだろうか。文献等からは見えてこない様々な問題が隠されているのではないかと。IB の教育の特徴、よさや問題点について当事者から直接話を聞き IB のプログラムに対して内面から考えていくのが本論考の目的である。

2 研究の概要

対象は東京学芸大学附属国際中等教育学校 (以下 ISS) の美術担当教師 (日本人 2 名, 米国人 1 名) および、ディプロマプログラム (Diploma Programme 以下 DP) 受講生徒 (6 年生=DP 2 年生) 7 名である。ISS は 2010 年に IBMYP (Middle Years Programme=中等教育プログラム) 認定校, 2015 年 IB デュアルランゲージディプロマプログラム (DLDP) 認定校になっている。DLDP は一部を日本語等の言語で行うディプロマプログラムのことである (以後 DLDP も DP と記述)。言語と文学【日本語 A: 文学】、理科【化学】等は日本語で授業を行うが、美術は英語で行う²。2016 年度に DP1 期生の授業が開始され、2017 年度最初の DP 資格を取得した卒業生を送り出す予定である。今回インタビューした生徒は DP1 期生 (6 年生) 8 名のうち当日欠席した 1 名をのぞく 7 名である。教師のうち 1 名は米国人教師で DP 担当, 日本人は、MYP と一般高校生担当と、MYP と DP 担当の 2 名である。

2.1 インタビューの概要

① 生徒 2017 年 5 月 15 日及び 22 日の 2 回に分け、それぞれのグループに対して行った。グループ分けについては担当教師に任せた。

- ・実施場所: 15 日は美術室, 22 日は普通教室。
- ・対象生徒: 15 日 3 名。その内 1 名は委員会の仕事で遅れてきた。22 日 4 名。
- ・実施時間: 両日とも 15:45 からおよそ 1 時間。
- ・倫理的な配慮: インタビュー実施の可否については担当教師を通じて管理職に事前に確認した。質問内容を担当教師にメールで送り、内容を知らせ、了承を得た。インタビュー時は、趣旨 (研究の目的, 研究成果の発表の方法) について直接説明し、本人から了承を得た。また、目的, 質問した理由,

データの管理方法、結果の扱い等について、生徒本人に確認のためのチェックシートを記入してもらい同意を得た。担当教師によると生徒自身も学問的誠実性についてIBで指導を受けており、チェックシートを記入することは生徒自身の研究の仕方の学習にもつながるとのことであった。チェックシートについては担当教師及び管理職から事前に了承を得た。インタビュー時は録音及び録画をした。それぞれ事前に、録音及び録画データについては、分析のみに使用し、それ以外は使用しないこと、保管はネットにつながらない環境で行うことを確認したうえで許可を得た。教師に対してのインタビューも研究の主旨を説明し同意を得た。

② 担当教師：7月20日及び8月3日に行った。7月20日はMYP及び一般高校生担当の日本人教師及び、DP担当の米国人教師に対して行った。実施時間は兩人とも約1時間、場所は美術科研究室で行った。8月3日はMYP及びDP担当の日本人教師に対して行った。実施時間は約2時間、場所は美術室で行った。

インタビュー時は、研究の趣旨を説明し、録音することの許可を得た。いくつかの質問内容を準備しそれに従って質問したが、当日の話の流れによって変化した。教師に対してはIB全体に対する共通の質問と、授業担当学年、内容等、それぞれで違う質問事項もあった。質問内容については事前に特に示すことはせず、インタビューの進行に合わせて行った。

3 生徒に対するインタビュー

3.1 対称生徒のプロフィール

インタビューを行った生徒の経歴は以下の通りである。性別や滞在先の国名等に関しては個人が特定される可能性があることからここでは示していない。

表1 生徒のプロフィール

インタビュー対象者	経歴	在外年数(概数)
A	日本生まれ。日本育ち。1年生から4年生までMYP, 5年生からDP。	0
B	日本生まれ。日本育ち。1年生から4年生までMYP, 5年生からDP。	0
C	日本生まれ。小学校の4年生まで日本。北米大陸に6年間在住。現地校に通う。2年前の夏に帰国。5年編入。夏から4月まではブランク有り。	6年
D	日本生まれ。3歳から4年間北米大陸在住、日本に戻る。小3の途中で北米大陸に戻り、小4から4年間ほど現地の学校に行って中1からISSに入学。	8年
E	欧州生まれ。8歳まで住んで、小2の時に来日。中1からISSに入学。	8年
F	日本生まれ。小1から小3の途中まで欧州在住。小6までは東アジアに在住。在外期間は2年半と3年半で合計6年。	6年
G	日本生まれ。小6の2学期から中1の2学期まで東南アジア在住。中2の2学期から南米大陸在住。中3の2学期に帰ってきてISSに編入。	2年

3.2 生徒に関する質問項目

以下の内容を質問した。時間の関係、インタビューの流れの関係でインタビュー内容が若干異なった。

3.3 研究の方法

インタビューした内容をカテゴリーごとに分類し、それぞれの生徒の話しを質的データ化し、分析を試みた³。

表2 生徒の回答

カテゴリー\生徒	美術科への印象(プラス)	美術科への印象(マイナス)	美術科への印象プロジェクトの内容	振り返りについて	内容ジャーナルの扱い	展覧会最終発表	IB選択の理由	IBの困難な点	TOKIについて、美術とのつながりはあるか	生徒の進路	IB美術が将来にプラスになっていると思うか
A	評価の合理性	英語での美術用語確認の困難さ。論文検索等研究方法を知る困難さ。学問として基本事項を教わらない	アイデンティティを表現するもの	形式のない振り返り毎回行う	自分の考えをかいてからまとめる記入項目参照先	テーマ アイデンティティ等これまでの経験	探究型学習への興味	テストがきつい。相手の要求に応えオリジナルティも出す。授業は楽しい。勉強の楽しさ。国語高度な内容	美という概念は一般的なものか	リベラルアーツ的なこと。いつかは海外で学びたい	考えを美術を通して表す。美術作品が意図とか背景とか混ざり合っている
B	自由度の高い題材	印象等を英語で伝えること。伝えないと評価されない	社会問題を表現するもの	欠損	自分の考えをかいてからまとめる記入項目評価項目	テーマ 社会問題アイデンティティ等	身近な人(兄)の影響	マネジメント。長期的な課題と、短期的な課題の両立	IBの売り。勉強が楽しい	メディアと政治学を専攻したい。海外で学びたい	芸術に興味を持ってた
C	フィードバックが得られる。互いを途中で評価し合える	インタビューできず	動画と写真を扱ったもの	形式のない振り返り毎回行う	自分の考えをかいてからまとめる。思考を深める	テーマ 時間の経過	IBに興味を持った	テストがきつい。解答づくり。最先端の議論	知識の得方とその発展の過程とどのくらい共有できるか。人によって解釈の幅がある。これは美術とつながるのではないか	一般企業。米国mbaを取得したい。対話力、分析力、意思を伝える。国内の大学。経済学	意図した重要性を訴える能力。交渉力や伝達力
D	自由度の高い題材。構造化できる達成感	インタビューできず	自己を表現するもの。影を使って表現	インタビューできず	プロセスが面倒。頭の中がかけない	インタビューできず	インタビューできず	マネジメント。長期的な課題と、短期的な課題の両立。論理的な分析の英語の授業	人によって何を美しいと感じるか。グループ	開発学。開発経済。公衆衛生など。海外の大学で学びたい	頭にある物を全部伝えることはできないのでは。それを頑張ってるスキル
E	自由度の高い題材	インタビューできず	environment art。フォトショップを使った作品	インタビューできず	デジタルも使用。思考のプロセスを書く	インタビューできず	インタビューできず	美術が一番面白い。リミットがなくて何でも作っていいからすごく楽しい。	真実とは何か	将来は決まっていない。海外の大学。ギャップイヤー活用	上手に説明できるかとか、プレゼンとかいろんなスキル
F	自由度の高い題材。材料の多様さ	インタビューできず	Sequence Art。アートで話を作る。流れがある。Art。音楽	インタビューできず	技法の研究	インタビューできず	インタビューできず	歴史でスペインの内戦。1期生のプレッシャー。試験の難しさ	インタビューできず	IBのような少人数の勉強を続けたい。アメリカの大学	違った視点を学ぶ。美術を見る目が変わり、広がった
G	自由度の高い題材	インタビューできず	自分を表す。アイデンティティを表現するもの	インタビューできず	活動の記録	インタビューできず	インタビューできず	提出に間に合わせる。マクベス	答えがないことが難しい。	心理学。日本に貢献したい。アメリカの大学	美術の見方が変わった。美術が身近に感じるようになった。論理的な説明の必要性

① プロフィール

各自のプロフィールを見ると日本で生まれた生徒が6名、海外で生まれた生徒が1名である。海外在住経験者が海外出生者を含めて5名である。海外での生活年数は、約8年の生徒と約6年の生徒が2名ずつ、約2年の生徒が1名、0年の生徒が2名であった。海外生活の場所は、南北アメリカ大陸、欧州、アジアと多岐にわたっている。

② IB美術について生徒が抱く印象

生徒が美術の授業についてどのように感じているか美術の授業に対する印象を聞いた。結果は、よい、好きというプラスの印象と、わからない、難しいというマイナスの印象が確認できた。

よいという印象では、自由度の高い題材設定を挙げる生徒が最も多く5名であった。生徒の意見は「テーマは決まっているが、メディアとか表現方法は自由なので、自分で自由にやれる」「美術じゃな

いような表現（コンピュータや音楽との融合など）ができる」などであった。IBDP では、プロジェクトのテーマのみが決定していて表現方法を生徒に選択させることは普通に行われており、妥当な結果が出た。生徒の中には日本の小学校で画一的な指導が行われたことにマイナスのイメージを持っている者もいて、その裏返しとして多様な表現を認める IB の美術についてよい印象を持ったようである。しかし、これに関しては日本の学習指導要領でも多様な表現も行われているはずである。むしろ、少人数での授業形態によって多様な表現が可能になっていると考えられる。それでも、大きなテーマのみ与えられ、あとは自分で考えていく授業形態は、生徒にとって新鮮に感じていたことが生徒の回答から改めて確認できた。他には、「自分の中で構造立ててそれを実現したときに達成感があるから好き」と答えた生徒がいた。単に与えられたことをするのではなく、自分で構造化し実現することのうれしさを感じていることがわかる。この生徒は、登下校などで、看板とか建築とか何でも（その対象を見ることによって）美術を考えられるようになったと述べていた。教室から外に美術がつながっていることを実感していたことがわかる。他の生徒は「評価の合理性」を挙げている。「技術力が限られていても、専門性とか、テクニックは限界があったとしても、自分の何かしらのメッセージとか、意味合いを込めていけばそれもちょうど評価してくれる」と話している。IB では MYP も DP もルーブリックが示されており、評価もルーブリックに従って妥当性を持って行われている。生徒もこのことを十分理解しており、どのように学習すればよいか納得した上で課題に取り組んでいる。作品の完成度のみではなく、プロジェクト全体が一つの研究であると捉えていることがこの答えにつながっていると考えられる。ただルーブリック自体は様々な問題も含んでおりこのことについては教師へのインタビューで触れる。

一方マイナスの意見は「英語での美術用語の確認の困難さ」を挙げている。生徒は作品や作家、様式等について英語で調査することが求められている。しかし美術の専門用語を英語でどう言うのか、アカデミックの体系を調べるにはどのような英語論文を調べるべきなのか等の確認の仕方がわからないといった「論文検索等研究方法を知る困難さ」を挙げている。つまり美術の内容を英語でどのように調査していくかをもっと具体的に知りたいということである。調査研究の環境をどのように設定し、どのようなアドバイスが必要なのかしっかりと示すことは教師側の課題でもある。また、作品をプレゼンテーションするときに「印象等を英語で伝えること」「伝えないと評価されない」ことを挙げている生徒もいる。IBDP では単に作品を制作して終了というのではなく、授業での調査研究や成果等を文章で記述しなければならない。しかも ISS では、それを英語で行わなければならない、相手にどのように伝えるかがこの生徒にとっては壁になっているとのことである。このことは日本語 DP になれば解決されると思われるが、文献等は圧倒的に英文が多いため DP を行う上で英語との付き合いがなくなることはないであろう。

③ 美術科で行ってきたプロジェクトの内容

DP 美術科でこれまでに行った最も印象に残ったプロジェクトについて質問した。7名のうち3名が5年生（DP1年生）アイデンティティーを表現するもの、または自己を表現するものと答えている。生徒の話によると、自分が生きてきた環境や影響されたことなどについてアートを使って表現するものと、自画像のような写実的な表現によるものではない多様な方法による自己表現の2つがあったそうである⁴。ある生徒は自身の環境などを表現したプロジェクトについて「8人全員が、カルチュラルアイデンティティーがある。全然違う素材、ものを使って、表現していたのでそれを鑑賞するのが面白かった」と述べている。他の生徒は「顔を描かない自画像みたいな題材で、影を使って」光で表現したことが面白かったと答えている。また別の生徒は、住んでいた東南アジアのダンサーの仮面や南米のビーチの風景と、祖母が着物の仕事をしていたことから着物と組み合わせて自分を表した作品について述べている。

他のプロジェクトでは、社会問題を表現するもの、環境と美術（environmental art）を挙げている。社会問題を挙げた生徒は「美について、何をもって美しいとしているのか、人間の体とか、人間のな

んか、例えば黒人と白人で人々は白人を好んでいたりとか、あとは細いとか太いとかだったら現代の人は細い方を好む傾向にある、なんか、そういうことに問題を感じてArtに表現した」と述べている。美術を通して社会について考えることにより、美術の奥深さ、面白さを感じ取ったと思われる。環境と美術を挙げた生徒は画像処理ソフトを使った映像表現の面白さを述べている。「花、手がいっぱいあった作品で、自分の手なんですけど、なんか茎みたいなのをみんなで握っているような絵で、その茎から自分で取った花の写真がバーッと流れ出ているような、そういう作品を作ったんですけど」と、写真を画像処理ソフトで処理することにより表現の幅が広がったことを述べている。

映像については他にも動画と写真を使ったことに興味を持った生徒もいた。「写真となった場合は自分の作った作品そのものだけでなく、背景であったり、照明であったり、いろいろな要素が加わるので作る作品だけでなくさらに考える別の要素がたくさんあってそこまで深めて作品なんだって考えた」と述べている。作品の制作のみではなく、もっと広い意味での創造活動について気がついたようである。また、ビデオ作品を挙げた生徒は「アートで話を作る 流れがある (Art Sequence Art)」というプロジェクトが面白いと話していた。この生徒は美術よりも音楽の方が好きだとのことだったが、この作品では自身で演奏した音楽を作品の中に取り入れることにより「音楽の分野を美術にもってこれたっていうのはすごい面白かったし、なんかすごい自分で感動した」と話している。

以上、印象に残ったプロジェクトをみると、以下の特徴が見えてくる。1つ目は自己を表現することや社会や環境を考えるなど、美術を通して美術以外のことにまで考えを広げていることである。形や色彩などの造形的な要素について学ぶことは当然であるが、それらを通して自分たちの世界を広げられたことに興味を持った生徒がいる。2つ目は新たな表現方法である。画像処理ソフトや映像表現、音楽との併用など、今まで扱ったことがない表現方法に強い興味を持っていることがわかった。いずれにしろ自分で表現したいものを広い選択肢の中から実現できること、教室の中の学習に閉じないで外の世界、美術の枠を超えた世界に広がっていく活動に生徒は興味を示していることがわかった。

④ アートジャーナルについて

IB芸術科ではアートジャーナルが学習の中で大きな位置を占めている。アートジャーナルは生徒の思考の経過や振り返り、様々な調査実験等を記録していくものである。このアートジャーナルの内容及び扱い方について聞いた。7人全員が回答した。

使い方としては「自分の考えをかいてからまとめる」というように、アイデアを描き出し、後できれいにまとめるという生徒が3名である。しかしこれは何らかの形で全員が行っていると考えられる。またアクリル絵の具やエアブラシの使用方法を研究する「技法の研究」、日付を書いて、今日やったことを記録する「活動の記録」等にアートジャーナルを活用すると答えている。これらはDPの公式ガイドブックにも説明されている使用法の基本的な事柄である。また、ジャーナルはとりあえずスケッチを描いてプロセスを記録し、提出はデジタルデータ、振り返りはパワーポイントでしているなど、電子データを活用している生徒もいた。このような流れは海外でも見られたが、ISSでも普通に行われていることが改めて確認できた。また、プロセスジャーナルをかくのが苦手であるという生徒もいた。「プロセスを記録するのが苦手ではあるが、作品を制作することが好きである」という生徒であった。そもそも「頭の中のを全部出さなければならないのがいや」で思考の過程をかくのが面倒くさいそうである。この答えもこれまで筆者が行った調査から予想できることであった。決して美術が嫌いであったり、苦手である生徒ではなく、むしろ美術が好きであったり、描くことが楽しい生徒でもこのような考えを持つことは自然である。つまり、美術という創造活動を行っているのと同時に調査研究や記録という研究活動を行うわけである。これは1度に2つの思考をすることになり、純粋に美術を楽しみたい生徒にとっては苦痛になるのもわかる。さらにこの生徒は思考の過程を視覚化すること自体に疑問を持っている。実際授業中の様子や作品を見ると、この生徒も決して美術が嫌いなわけではないと言う印象を受けた。

アートジャーナルの可能性については、思考の記録、評価の時に証拠として活用する等、日本の美

術教育に有意義な面は多くあるとこれまでの調査から考えている。今回の結果は今までの研究通りの結果であると言えるが、面倒くさいと感じる生徒がいるなど、さらに考えていかなければならない面が改めて確認できた。

⑤ 最終発表展覧会について

3名の生徒に質問した。DP 美術では最終的な試験の位置づけで発表展覧会が設けられており、内部評価が担当教師によって行われ、結果が IB 本部に送られる重要なものである。生徒は各自でテーマを設定し発表する。これについて現在どのような内容を考えているのか3名の生徒に話を聞くことができた。生徒が現時点で考えているテーマは、アイデンティティーを挙げた生徒が2名、時間の経過を挙げた生徒が1名であった。アイデンティティーを挙げた生徒のうち1名は「これまでの経緯や記憶をリソースにしてきたことが(美術の授業では)多かったのをそれをテーマにしていきたい」と述べ、もう1名は色彩を使って社会問題を扱いながらアイデンティティーを表したいとのことであった。時間の経過をテーマにしている生徒は「昔から現在に至るまでの、技術の革新であったり、人々の考え方の変化であったり、あと、社会問題も取り上げられることが多いので、時代の変化とともに、社会問題とか、時間の経過をテーマにしたエクセプションを考えている」というようになり具体的な内容を示していた。いずれの生徒においても、これまで印象に残った授業と関連があり、日々の授業の積み重ねが最終のテーマにつながっていることが改めて確認できた。

⑥ IB 選択の理由

3名の生徒に質問した。生徒がなぜ IB ディプロマクラスを選択したのか聞いた。その結果は①「探究型学習への興味」、②「身近な人(兄)の影響」、③「IBに興味を持った」の3つの理由からそう思っていることがわかった。①を挙げた生徒は、前期課程のプログラムである MYP も面白かったと答えており「自分でいろいろ考え、意見を公開し、話し合っって振り返ってのようなやり方が好きだったし、面白いなと思った」と言っているように自ら調べ考え学んでいく学習方法そのものに興味を持っているようである。②を挙げた生徒は IB については全く知らなかったそうで兄から聞いた「素晴らしい人がみんな IB 取っているの、IB 取りなよって進めてくれました」という意見が影響しているとのことである。③を挙げた生徒は海外の大学に進学したいこと、同時に IB について調べていくうちに、IB の目標、特徴的な内容について興味を持ち、勉強したいと思った、と理由を述べている。この生徒は卒業後の進路を考えた上で IB を選択しているが、それだけでなく IB の理念や教育方法を調べていく中で、そのよさについて知ったことも理由として挙げていることがわかる。IB 選択の理由についてもインタビューできた生徒は少なかったのであるが、本人が IB のよさについて考えていたり、若しくは身近な人が IB のよさを生徒に伝えたりして、それをきっかけに IB というなじみのない、しかも決して取得することが容易でない資格取得を決意したことがわかる。ここで挙げられた答えは、IB についての感想や、自身の将来構想についても関連してくるので、そこでまた触れてみたい。

⑦ IB 全体について思ったこと IB の困難な点

全員に質問した。美術に限らず IB の内容全体について聞いた。単に美術のことだけでなく、他教科や IB 全体について生徒がどう思っているかを聞くことにより、生徒から見た IB の現状を知ることができると考えた。この質問は IB 全体についてどう思っているかを質問したのであるが、多くの生徒が困難な点を挙げている。それだけ、IB はハードルが高く努力が必要であることを示していることがわかった。

生徒の答えで多く出ているのは、学習時間等を管理するマネジメントについて4名、テストの困難さについて3名であった。マネジメントについては「同時進行でいろいろなタスクをしなければいけない、一つ一つが手が抜けない」「長期的な課題を考慮しながら短期的な課題が次々来るので、課題がないときはない。努力して当たり前で、効率性を求められる。」というように、学習それぞれの課題を同時にこなしていく困難さを挙げている。しかもそれぞれの内容が高度であることも挙げている。「授業一個一個の内容が IB やってない人が見たら、何これ、っていうふうに難しく見えると思うんですけど

ど、でも先生たちも結構順序立ててやってくれているから、だんだん慣れていくということもあると思う」のように高度な内容ではあるがそれがうまくプログラミングされていることを生徒も気づいていることもわかる。

テストについては「IBのテストは求められているものというか、評価規準が特殊というか、限定されている。求められていることが解答に含まれていないと点が入らないなど、そういったことを想定した上での解答作りの練習をしないとだめなので、ひたすら勉強というより、ある意味トレーニングみたいな感覚」というように、IBのテストの特殊性というか独特な難しさを挙げている生徒もいる。また、マネジメントにも関連してくるが、定期テストのような「内部（internal）アセスメントで頭がいっぱいで、本番の外部（external）アセスメントも勉強したいけど」そこまで手が回らず、不安を感じている生徒もいた。他には「相手（出題者）の要求に応えながらもオリジナリティを出さなければならぬ」「DP1期生なので、いろいろな面で注目されプレッシャーになる」等を挙げた生徒もいた。解答にオリジナリティを出さなければならぬのは、単に正解を求める高校までの学習を超えた大学レベルの研究に近いものと考えられる。また「DP1期生」というのは、考えてみれば学習面、生活面全てに対して大きなプレッシャーになっているのは事実であろう。全く新しいことを高校生が行っているのであるから、そのことについては周囲の大人も理解していく必要があると感じた。

この質問ではIB全体について生徒が思ったことを聞いている。生徒たちは様々な授業での面白さ楽しさについても答えている。例えば、国語では1学期で1つの文学作品を扱い、それについての研究論文を読む。「今までそんな経験したことなかったから、今まで論文をこんな日常的に、読んでそれを踏まえて自分はどう考えるかを求められるから、自分も研究者になった感じがします」のように、いわゆる学校での勉強ではなく、研究をしていると言う自覚を持ったと答えている。また同様に国語の授業では、「例えば文学だったら、ある作品に最先端のこういった解釈がなされているっていう主流の考え方があって、それに対して過去にはこういった解釈もあるとか、その分野の最先端で行われている議論の場について先生が教えてくれるので、やっていて意義を感じている」と最先端の研究に触れる楽しさについて述べている生徒もいる。歴史では「スペイン内戦についていろんな面から調査、どいう国がどいう方法で干渉したかとか、そういうのを見たりとか、使われた武器を見たりとか、社会的な影響、経済的な影響とかいろんな面から見て、長くやったんですけど、教科書には細かいことは書いてないんですけど、すごい重要な出来事だったんだなって」感じたことを答えている。日本の教科書には2,3行しか書いていないことをじっくり学ぶことについて、生徒は純粋に歴史の面白さを感じ取っているようである。他にも「英語のショートストーリーのアリス・マンローっていう人が書いた短いストーリーを1個1個分析した。こういうことが書いてあるから、こういう意味を持っているから、こことつなげてみたらこういう意味だとか、すごい、言ったら数学的なのかな、すごい論理的に、だけど詩的なポワレックな表現技法なんかを分析して、それに意味を付けて、それがどいう影響を及ぼしたかみたいな、そこまですごいいっぱい考えた」と、英語の学習の奥深さを述べている生徒もいる。美術が一番面白いと挙げた生徒は「自分でやってはいけないっていうリミットがなくって、何でも作っていいからすごく楽しい」と述べている。美術の持つ自由さ、柔軟さを十分理解した上で、創造活動する楽しさを感じているようである。

これらの学習を見ると、単に表面的に語句を説明し、試験のために暗記をするといったレベルではないことがわかる。何が問題なのか、なぜ学ぶのか、学んだことでどのようなことがわかり、それは私たちの今の生活にどのような影響を与えるのかといったことまでつながる学習を行っているからこそ、生徒たちは面白いと感じるのであろう。IBの学習が高度な要求をする一方でその内容が深く、それによって生徒の学習に対する満足度が高いことがこの質問からわかった。

⑧ TOKについて、美術とのつながりはあるか。

次に、IBDPの特徴の1つである、TOK（知の理論）と美術との関係について聞いた。TOKはDPの「コア」となる3つの必修要件の一つである。「『知識の本質』について考え、私たちが『知っている』と

主張することを、いったいどのようにして知るのかを考察」⁵ するもので、その目的は「共有された『知識の領域』の間のつながりを重視し、それを『個人的な知識』に結びつけることで、生徒が自分なりのものの見方や、他人との違いを自覚できるよう促していくこと」である。教科を超えたユニークな学びである。ここでは TOK についてどう考えているのか、さらに美術とつながるところはあるのかについて聞いた。

TOK については 6 名から回答を得た。しかし、その結果をカテゴリ一別にはっきりと分類することは難しかった。TOK 自体が高度で複雑な学習内容であり、生徒の捉え方もそれぞれであった。回答の主なものには「美という概念は一般的なものか」「知識の得方とその発展の過程とどのくらい共有できるか」「答えがないことが難しい」ということがあった。

TOK についてある生徒は以下のように答えている。

TOK が主眼に置いているのが、知識の得方と、その発展の過程と、そのあとそれがどのくらい共有されているか、共有されるのか、そのようなことが、主な内容だが、自分たちが勉強していて知識って、どのようにして得られるのだろうかとか、そのプロセスは他の人の文化とか背景によって違うのかとか考えるのは、他の科目ではまったくやらない視点なので、最初は何かつかみ所がない気はしました。

と、知識そのものについて考えていく TOK の難しさについて述べている。また、その生徒は以下のように TOK と美術の学習のつながりについて各自の解釈の幅について考えている。

TOK の教育内容に沿った考え方を知った後だと、美術でも人の解釈に幅があるのは、例えば人によって知覚が最初に作用したり、感情が先に来たり、それともこの作品を見てこの人は自分の記憶をたどって、こういうことを考えたから、こういった解釈が先に出たって言う違いが TOK で考えたようなことから生まれてくるのかなって思うところで TOK とつながる部分かなと思う。

そしてこのような内容について多くの議論をクラス全員でするのでと言っている。

「美という概念は一般的なものか」について別の生徒が「何がアートで、何がノンアートだって言うのは誰がどう決めるのか。私たちはネームバリューやブランドでアートを判断しているのでは。実際は何が美しく何が美しくないってというのは、考えてないんじゃないか。」といったことを考えることによって「この作品は美しいって知っている知識はどこから来るのかを考える」のだと言う。

TOK のプレゼンテーションを芸術でやったと言う生徒は「何を美しいと感じるか。その美しいと感じるまでのプロセスは何か」をテーマに話したという。そして、この生徒は「TOK はループ」であり、ゴールにたどり着いたと思ったらまたスタートに戻ってしまうことが良くあると言っている。

以上のことをみても、確かに様々なことを生徒は考えているが、美術との関連性についていうならば、TOK という学習の中で、美とは何か、なぜ人は美を感じるのか、美術の価値は何かといったことを深く考えているのがわかる。もちろん、TOK は芸術に関するだけでなく、他の学習分野の内容も考えていくのであり、まさに教科を超えて教科内容の本質を思考していく時間なのであろう。これは、まさしく IB の特徴であると考えられる。そして生徒も「TOK が面白いと感じていて、(TOK は) IB の売りだと思います。勉強が楽しい」と語っているように TOK を学ぶことによって学習の奥深さを感じ取っているのである。TOK と美術教育の関係についてはさらに研究していく必要がある。

⑨ 生徒の進路

生徒たちは将来どのような進路を考えているのかについて聞いた。この質問をした意味は、IB ディプロマ資格を取得するという日本ではまだまだ一般的でないシステムで大学受験を目指している生徒たちが将来どのような方面へ進み、何をしたいのか、そのためには大学でどのような研究をしたいのかを聞きくことにより、生徒が自分自身の将来のために IB をどう捉えているのかを具体的に知るために必要であると考えたからである。

7 名全員に質問した。回答を見ると海外の大学で学びたい=5 名、日本の大学で学びたい=1 名、大学とははっきりとは答えていないがいつかは海外で学びたい=1 名であった。

圧倒的に海外の大学で学びたい生徒が多かったが、これは IB という性格上、当然のことと考えられ

る。海外の大学進学希望者の中で、具体的な研究内容を挙げた生徒は、「メディアと政治学」、「開発学」、「心理学」、を挙げており、他は「まだ特に決まっていない」、「リベラルアーツ的なことを学びたい」、「IB のような少人数で学びたい」等であった。特に決まっていないと答えている生徒も、「海外の大学に進学し、ギャップイヤーを取って、そこでやりたいことを探してみたい」、「細かいことは決まっていないが（将来は）日本に軸をおいて日本に貢献できることをしたい」等の方向性は考えていたことが改めて確認できた。日本の大学を志望している生徒は、「大学では経済学を学び将来は米国で MBA を取得したい」とのことであった。この生徒は「IB でやってきたことは対話力、分析力、意志を伝える力などの自己表現が主なので将来の夢のためにはとても有意義である」と答えている。

これらを見ると DP 取得を目指している生徒はやはり何らかの形で海外での研究の機会を目指していることがわかる。しかし、ただ単に海外の大学を目指すのが目標ではないこともわかる。もちろん現時点では、はっきりと進路を決めていないと答えている生徒もいる。課題が多く日々の生活に追われる生徒にとってそれは当然のことと考えられる。しかし、それぞれ自分がどのような勉強をしたいのか、自分の学んだことをどのように社会に貢献させたいのかを考えており、そのために IB で学んだことは生きてくると考えているのである。

⑩ IB 美術で学んだことが将来にプラスになると思うか

7名に質問した。上記の生徒の進路の質問でいずれは何らかの形で、海外で学びたいと答えていて、IB の学びが将来に結びついていることを生徒は実感していることがわかった。次に IB 美術の学びは自分の将来に対してプラスになっていると思っているのか、それとも特に思わないのかについて聞いた。結果は美術に直接関連するものと、美術以外のスキルについての回答に分かれた。美術に直接関連するものでは、「考えを、美術を通して表す」「芸術に興味を持てた」「美術の見方が変わった」などである。例えば美術を通して表現することを学んだことや美術作品には作者の意図や時代背景が混ざり合って成り立っていることを感じたと答えた生徒がいた。この生徒は美術よりも文章で伝える方が得意だそうだが、美術の表現方法を学んだことは一生ついてまわるものだと答えている。また、芸術に興味を持てたことは考えが豊かになるという意味で価値があると答えた生徒もいる。

一方スキルの内容では「伝達力」「交渉力」を挙げた生徒が多い。「作品で自分が意図した考えとか、工夫した点とかを発表して、それをいかにうまく伝えるかとか、そこで、意図したことがなぜ自分にとって重要なのか」を伝える力は将来コンサルタント業などになったとしても役に立つはずであると言う生徒がいる。また他の生徒は、頭の中にあることを全て表現することは無理なのではないか。そしてその中でできた「作品をみんなに説明する場でも、わかってもらいたいという気持ちがあるから頑張って説明する、そういうスキルが将来自信になる」と言っている。同じ伝えるスキルでも、前者は比較的クリアになっている表現内容を論理的に伝える力のことで、後者は作品には十分現れていない内容を何とか相手が理解できるように伝える力のように思えた。美術作品に対するそれぞれの考え方の違いが現れており興味深い。しかし双方の生徒共に、創造活動をした上での伝達力を述べている。これは他教科では養いがたい、美術で培った力であろう。

3.4 生徒に対するインタビューへの考察

7名というごく少数へのインタビューであるがいくつかの特徴が見えてきた。まず DP の学習は決して楽なものではなく、厳しいものであることを生徒は十分自覚しているが、学習することの楽しさを DP の高度な学習内容の中から感じ取っていることがわかった。そこにはお仕着せの勉強ではなく自分たちで内容を深く探究し答えを見つけていく面白さ、いわば研究することの面白さを彼らは知ったのである。これは IB が掲げている学習者像⁶の、探究する人、知識のある人、考える人等につながるものであり、IB の目指すところを実現しつつあるのであろう。次に、美術に関していうと、8人という少人数の中で、自分たちの表現したいものを友達と議論しながら創り出していくことに楽しさを感じていることが改めてわかった。単なる絵画や彫刻を学ぶのではなく、社会全体であったり、自分たち

の内面であったり造型活動を通して学んでいくことに生徒は純粋に興味を持っている。しかも、これまでは美術の表現方法とは思っていなかったコンピュータや映像機器等の活用によって表現の世界が広がったことに生徒たちは自身の表現における新たな可能性を見いだしたのである。これは日本の芸術教科としても重要なことであり、今後の授業でも生かしていくべき内容であると考えられる。もちろん、生徒たちはこの学校の美術科の授業しか知らないわけで、他の学校でも同様のことをやっているかもしれないという事実を知らない。それは仕方のないことであるが、少なくともこの学校で行われている、作品制作はもちろん調査研究や思考さらには発表まで重視した DP の授業は多くの高校の美術の授業に応用する価値があると考えられる。

彼らが答えていたように、美術で得た経験が今後の自分たちの将来に生きると実感していることは、学校に美術という科目がある必要性を改めて確認できた。

4 教師に対するインタビュー

生徒へのインタビューと平行して美術科担当の教師にもインタビューを実施した。インタビューの目的は国立で唯一の IBMYPDP 認定校である ISS で IB という希有な教育システムを実際に担当する教師が IB をどのように感じ、捉えているのかを直接聞き教師から見た IB の実態を知るためである。

4.1 インタビューの対象

以下の 3 名の教師にインタビューを行った。3 名の簡単なプロフィールである。

P 教諭 米国出身。美術及び英語担当。7 年間勤務。

N 教諭 日本出身。MYP4 年生と DP 以外の 6 年生担当。今年度国内派遣で ISS 勤務。これまで高校等で美術担当。

G 教諭 日本出身。MYP と DP 担当。今年度より ISS 勤務。これまで国立公立の小学校図工専科等担当。

4.2 インタビュー実施日及び場所

N 教諭 2017 年 7 月 20 日 15:00~16:00 美術研究室

P 教諭 2017 年 7 月 20 日 16:00~17:00 美術研究室

G 教諭 2017 年 8 月 3 日 10:00~12:00 美術室

4.3 研究の方法

インタビュー結果はカテゴリーごとに分類し内容ごとに分析する方法をとった。質問事項は事前に考えていったが、それぞれ担当する学年や MYP, DP というようにプログラムの内容も異なっているため、質問は 3 人で違ったものになった。よって同一の質問事項の 3 人の回答を比較するというのではなく、関連する内容ごとに関係性を見ていくこととした。カテゴリー化できた主な内容は、①MYP・DP の授業内容、②MYP・DP の授業計画、③MYP・DP の評価、④MYP・DP の概念理解⁷、⑤MYP 探究の問い、⑥MYP グローバルな文脈、⑦DP 美術の目的、⑧DP 最終展覧会、⑨生徒の将来像、⑩ISS のシチュエーション、⑪IB を実施する上での規模、⑫学習指導要領との関係、⑬その他である。

カテゴリーの分類は質問や回答の内容の意味から判断した。以下各項目別に見ていく。

① MYP・DP の授業内容

授業内容とは MYP や DP の授業を実施していく中でその内容の特徴であり、特に注目すべき点であると教師が捉えていることである。この項目については、DP について P 教諭、MYP について G 教諭から聞くことができた。P 教諭は DP の特徴としてその目的について触れている。彼によると美術の（特徴でもある）主な目的の一つは実験（experimentation）であり、新しいことに挑戦することだと言う。また、美術そのものが目的を持っているものであり、しかも DP ではその目的を他者に伝えることが大切であると述べている。また、授業を行っていく上で教師は生徒のガイドであり、生徒がアイデアを

表現できるようにサポートすべきであり、IBの授業は単に作品を制作するだけでなく、自分が創造している課題について、アーティストや他の美術の実例をリサーチしなければならないとしている。このことは、単に作品を作るだけでなく調査することもIBは求めている、と生徒が答えたことにつながっている。

G教諭は、MYPの授業内容について、まず、美術に限らずMYP全体の特徴について触れている。それによると、MYPでは1年生から課題をコンスタントにこなすこと、そして思考の過程を残していくこと、入学時からIBに慣れることが大切であると言う。G教諭は1年生の担任でもあり、IBに慣れる必要性を保護者にも話しているとのことであった。また、MYPのメリットとして、MYPの美術は感性などを大切にしていくプログラムではあるが、それを自分で思考しながら構成していくシステムが確立されているのではないかと述べている。日本の学習指導要領でも、感性や情操面の教育を目標として掲げているがIBはそれがシステムティックに組織されていると言う。日本ではどうしても作品中心になりがちであるが、「意志として自分の思考として補っていくか」つまり意識的に思考しながら活動を行えるところがMYPのメリットではないかと述べている。

一方デメリットについては、概念理解だったり探究的な学びであったりするMYPの学びの特徴を理解できない生徒は全ての教科で理解できなくなる危険性について指摘している。つまり「良くできている子」はどの教科でも良くできるのである。MYPの特徴である「グローバルな文脈」⁸などの独特の学習項目をきちんと理解できる生徒である。それ以外の生徒つまり最初にグローバルな文脈であったり、重要概念⁹であったり、これらのMYPを学んでいくためには理解しなければならない語句をきちんと最初に理解できない生徒、IBの「土俵に乗れない子」は学習が進むにつれてフォローが必要になるであろうとのことであった。教師がフォローをすとはいえ、システムティックであるからこそ、理解を十分にしないままだと全ての学習に影響するということは、生徒にとってはかなり厳しい面であると感じた。また、グローバルな文脈などを理解しなくても授業での学習自体はできてしまうのでその面も後々大変であろうとG教諭は述べている。

② MYP・DPの授業計画

どのように授業を計画しているのか、授業計画における特徴は何かについて聞いた。P教諭はDPの授業計画について、シラバス、年間計画、テーマの設定について答えた。DPのシラバスは公式ガイドブックに示されているが少し複雑である。文脈に沿った美術 (Visual arts in context), 美術の方法 (Visual arts methods), 美術のコミュニケーション (Communicating visual arts) の3つのコア領域があり、さらに理論的実践 (Theoretical practice), 作品制作の実践 (art-making practice), キュレーションの実践 (curatorial practice) の3つの実践が示されている¹⁰。その関係性について実際どのように行っているのかを聞いた。P教諭によると、それぞれのコアシラバスは常に行われているが、実践の段階によって重み付けが違う、例えば、文脈に沿った美術ではリサーチを、美術の方法ではスキルを、コミュニケーションではそれを話し合うことに重点が置かれる。プロジェクトの最初の段階ではリサーチが大切であり、発展的な段階では実験、キュレーションの実践の段階では、コミュニケーションが重要になってくるとのことである。そして、この計画は年間計画として年度の初めに作ってそれを基にしているとのことである。さらに題材についてレクチャーはどのように考えるかを聞いたところ、最初に創造させるにはどうしたらいいか、例えば文化について学習するとして、何の文化について創造させるか、ではどのようにそれを得るのか、そのためにはどんなアーティストがよいか、文化的な背景は、というように逆向きに考えていく、逆向き設計で計画する、とのことである。他にも年間いくつプロジェクトを行うか (→4~7個の作品展示をするので7個だ) プロジェクトのテーマ設定方法等 (→シンプルなものから複雑なものへ) を聞きISSの美術科のカリキュラムの概要について知ることができた。

これらを見ると公式ガイドブックに則って授業計画を行っていることが改めてわかった。当然のことではあるが、IBの認定校である以上、授業計画の厳格さを改めて確認できた。そして同時にコンテ

ンツ重視でないこともはっきりとわかった。油絵による静物画や版画技法を使った平面作品等の授業計画は一切ない。芸術とは何かを考えさせながら、あくまでも概念的な理解を目指して授業計画をしていることがわかる。

③ DP・MYP の評価について

評価については常に問題となるところである。IB の学校現場ではどのように捉えているのであろうか。3 名全ての教師が評価について語っている。

N 教諭は MYP の特にルーブリックによる評価法について述べている。MYP では全ての教科であらかじめ作成したルーブリックによる評価を行う。それぞれの単元等で使用するルーブリックの基となる例が公式ガイドブックに掲載されており、それを参考に現場の教師が作成するようになっている。そのルーブリックの扱いについての指摘であった。N 教諭によると、ルーブリックの項目の中に「スケッチとかアイデアとかを出して悩んだところから（その結果として）アイデアを出した」というような項目があり、この項目が最上位の段階の基準となっているそうである。しかし、ここまでできている生徒がほとんどいない。また、とにかくアイデアスケッチを描けば点がもらえると思いき、制作が終わったあと、もしくは制作の途中で、アイデアスケッチを描いてくる生徒もいる。教師としてもできるだけ評価したいので点をあげてしまうことになる。しかし生徒は本当に学んでいるのか、という疑問がわくとのことであった。単にルーブリックに「具現化」とあるのでアイデアスケッチをしている生徒もいるというのである。これはルーブリックの弊害だといえるだろう。また、システムに沿ってやっていると点が取れることになっているので、単に点を取るシステムとなっている面はちょっと問題なのではとのことであった。ルーブリックはパフォーマンス評価を行う際に規準及び基準を明確にできるという面で有効であるのは間違いない。しかし設計段階で注意しないと妥当性のある評価から離れてしまうのでは、という現場からの指摘である。

G 教諭は評価における MYP の特徴を挙げている。つまりエビデンス（＝証拠）が存在しているため評価はしやすいという。IB は生徒のインタビューにもあったように DP にしろ MYP にしろ、活動の記録を残していくことは、資格取得という面からも大変重視されており、特徴の一つといってもよい。つまり、もともと多くのエビデンスがあるので評価の時には特に困らない、とのことであった。ここで問題となるのが先ほどの N 教諭が指摘していた規準となるルーブリックの扱いである。「評価規準を作るときに、文言もそうだが、何を含めているかをちゃんと伝えるように、書いているかどうか为非常に左右される」と指摘しており、例えばスキルを求めた作業のみの評価規準を作ろうと思えば作れてしまうという。まさに、ルーブリックをどのように作るのかが IB のようなルーブリックを活用した評価では重要であることが改めて確認できた。

G 教諭は DP の評価について言及をしていた。DP の特徴として授業担当者が行う内部評価と、データを本部に送って試験官が採点する外部評価がある。日本の美術教育では一貫して情操面の育成を前面に打ち出してきている。そのような中で G 教諭は、IB 認定校の教員が閲覧できるオンライン上のコンテンツである OCC（オンラインカリキュラムセンター）で示されている過去の評価例はかなり技能面が重視されているのではないかと、いうのである。筆者も確認したがかなり技巧的な参考作品も紹介されていた。評価については国際的な評価規準が設定されており、厳格さが謳われている IB ではあるが、確かに試験官によって左右されることはないとは言えないので、担当者としては心配するのは当然であろう。IB では評価の公正性を担保するために、この国際的な評価規準と、IB 実施校担当教師のためのワークショップの参加、さらに内部評価に対するモデレーションを実施しているが、ISS は今年度が初めての DP 試験であり、試験結果に不安を持つのも当然である。公式の評価規準に当てはめていけば問題はないと言えるが、それでも評価については、今後さらに追跡調査する必要がある。

④ 概念理解

IB の学習の特徴である概念理解について、N 教諭と G 教諭から話を聞くことができた。N 教諭によると、IB についての経験が十分とはいえず、「概念について理解することは難しい（N 教諭自身がまだ

慣れていないので)」とのことであった。また、IBは重要概念等の縛りが多いとも感じているそうである。一方IBではない授業ではよい意味でも悪い意味でも今まで通りにやっているとのことであった。

G教諭は教師自身が「重要概念のイメージがないままで話をしても、自分に根拠がない授業をやっている」ことになってしまう。だいたいイメージでやってしまうことの危険性を、実例を示しながら話してくれた。教師がその授業で取り上げるべき概念は何か、つまりどんな概念理解を生徒にさせたいのか、はっきりとした上で授業をすることが大切なのだということであろう。さらにDPの学習まで見通すと「1問1答の課題でよいのか」というところまで言及していた。つまり概念を考えさせるときに、簡単な質問に答えるだけでは深い概念理解ができないのではないかと、DPの学習を考えるならもっと深く考えさせる習慣を付けさせるべきであろうと言う。これは探究の問いにも関連することである。単純に答えられることではないからこそ授業で問いながら、この題材で考えるべき概念とはどのようなことなのか考えさせることを、常に考えていく必要がある。MYPでは重要概念や関連概念は公式ガイドブックで示されているが、DPには「扱うべき概念はこれ」と言うように特に示されていない。G教諭はMYPもDPも行っている学校だからこそDPの授業にもMYPの重要概念が生かせるような工夫が必要であろう、とも述べている。確かにMYPで示されている概念をDPでも活用することは、それぞれのプログラムや学習の連携、概念理解へ生徒を導くための効果的な足場作りになり得ると考えられる。概念理解はわかっていそうでよくわからない面もあり、このことについても今後の研究の余地がある。

⑤ 探究の問い

探究の問いは探究的な学習をするために授業者が生徒に発するものである。「内容主導である」＝「事実的問い」、「教科内の、そしてより学際的な内容についてのより深い理解に導く」＝「概念的問い」、「ある立場で議論するために事実や概念の使用を可能にする」＝「議論的問い」の3つがガイドブックに示されている¹¹。教師はこの問いを活用して探究的な学習を行っていくのである。G教諭は「いきなり出された問いは、哲学過ぎてよくわからない」また、「学ぶものが概念であり、コンテンツではないので、そこ（コンテンツ）から離れればいくらでも作れるなど思う」と言っている。生徒にとってわかりやすい、しかも探究的な学習に引っ張っていきそうな問いを設定すべきということであろう。また上記にも示したとおりコンテンツありきではなく、概念を学んでいくことを念頭に置けば問いも考えやすいということだと思われる。さらに「TOKに入ってしまうが、あのあたりからアプローチすると作りやすくなる」と述べているように、生徒のインタビューにもあったTOKはIBにとっても重要なポイントになっていることがここからもわかる。N教諭も「(公式ガイドブック等に英文で示された例等にある)英語が先にある(英語の翻訳から考える)」のではなく生徒がわかりやすい問いが大切であると述べている。さらに「自分の発想とつながらないと問いが問いで終わってしまうことになってしまう」としており、自身の学習とつながる問いの大切さを考えていることがわかった。二人のインタビューからは、問いが学習につながり、生徒が授業の中で実際に考えられるように設定することが大切であることが改めて確認できた。また、そのためにもTOKの学習が一つヒントになることもわかった。

⑥ グローバルな文脈

「MYPにおける学習の文脈はグローバルな文脈から選択され、国際的な視野の育成とプログラムの中でのグローバルな取り組みを促進」¹²するとしている。さて、このグローバルな文脈に付いてN教諭は、やはり授業の中で課題内容が出てしまい、捉え方が難しいとのことであった。G教諭は例えば「グローバルな文脈を自分で選んで議論的問いにするというようなことを考えるとしたらどうなの」ということを生徒に考えさせるとグローバルな文脈の1つである「アイデンティティーと関連性」が自然に出てくるのではないかと述べている。確かにグローバルな文脈は非常に大きな枠組みであり、捉え方も難しい印象がある。生徒自身の状況に合わせて考えさせることも大切なのかもしれない。そして、生徒はグローバルな文脈を国際教養（ISS独自の科目）等で経験しているので、しっかり理解させる必要が

あるとしている。上記の通りグローバルな文脈はMYPにおける概念理解の基本であるがいわゆる学習内容ではないので「やらなくてもどうにかなる」ものだそうである。しかしIBの学習の深いところまでを考えるとグローバルな文脈の意味するところをしっかりと理解させる必要があるという。地球規模で常に学習を捉えることがIBの大きなポイントであり、グローバルな文脈はその学習の重要な位置を占めている。それを生徒に考えさせるためには先ほどの概念理解と同様、教師が意味をしっかりと理解する必要があることがわかった。

⑦ DP美術の持つ目的

これについては① MYP・DPの授業内容の中でP教諭が述べている。DP美術の特徴について示されている。目的の一つは実験（experimentation）であり、美術そのものが目的を持っているものであり、その目的を他者に伝えることとしている。

⑧ DPの特徴 最終展覧会

美術科のDP資格を得るためには最終の展覧会を行うことになっている。これは他教科の試験と同等に位置付けられるものでIBの美術科ではきわめて重要なものである。生徒インタビューでも展覧会について内容を決めている者も決めていない者もいるなどばらつきはあったが、関心は高かった。展覧会についてはDPを担当しているP教諭とG教諭に聞くことができた。P教諭によると生徒たちはスクールトリップで上野に行きそこで博物館等を訪問、国宝等美術品を鑑賞したそうである。また同年代の生徒が出品している展覧会も鑑賞した。このことで美術が身近に感じた生徒が多かったとのことである。そしてこのような経験がDPの最終展覧会につながると答えている。P教諭は展覧会について、実施する会場に対する問題点を挙げている。今年度は8名であるが来年度は17名でありスペースの関係で不安があるとのことである。

G教諭も展覧会については展示スペースや設備等の物理的な面を心配していた。P教諭と同様に人数が倍になる来年度はどうするのかはじっくり考える必要があるとのことであった。展覧会は文字通り生徒の成果を発表する場でもあるが、同時に重要な試験会場でもある。生徒作品はいわば未発表の答案であり厳重に取り扱わなければならない。従って参観者や、写真撮影は当然制限されるべきものである。このような性格である展覧会の運営は教師にとってもかなりのストレスを生じるはずであり、初めての実施であればなおさらである。さらにDPの授業内容にキュレーションの実践があるように、キュレーション自体もIBの美術では評価の対象になる。教師が展示の全てをすればよいのではなく、キャプションや展示スペースに掲示する紹介文の作成等生徒に任せる必要がある。これら全てを運営することが教師にかかっているのである。このように最終の展覧会はDP美術科では非常に大きな位置を占めていることがわかる。一方、展覧会は生徒の美術活動2年間（実質1年半に満たない）の成果を発表する晴れの舞台である。できれば展覧会には下級生が参観に訪れ、下級生が美術に興味を持てるような今後の指針になってほしいとのことであった。

⑨ 生徒の将来像

生徒に対するインタビューでは自身の将来について尋ねた。一方、教師に対してはどのような生徒に育ててほしいか、また美術が生徒にどう役立つかについて聞いた。P教諭とG教諭に聞くことができた。

まず美術は彼らの将来にどのように役立つと思うかの問いに対してP教諭は「将来、彼らがどのような職業に就くかにかかわらず、視覚的に自分たちの考えを表してプレゼンテーションできる、彼らがプレゼンテーションをするときはグラフィカルなものを使ってできるとか、決まり切った表現ではなくいろいろな方法で表現できる」とのことであった。そしてG教諭は以下のように捉えている。

視覚伝達表現を生活や仕事の中で使いこなすことができるのも大切なことです。そして、私の視点ではインディヴィジュアルなもの、個性の確立と認め合いができるのが美術の時間ではないかと考えています。自らのバックグラウンドや経験、興味や関心、知識が軸となる DP の美術の授

業は、自己表現そのものです。自分が見てもらいたいもの、訴えたいもの、共感して欲しいものなどを形や色彩で表現できるのです。アイデアとその背景について創造的に見つめることをしています。個性の尊重とは、その人を保障することだと思えます。自分とは違ったベクトルの価値観があり、その多数の価値観はすでに世の中に多く存在していて、自分もその一つであることを理解しておくことが美術ではできるのではないのでしょうか。バランスをとりつつ、自分のプロジェクトを実行する原動力を養うことができるものと考えます。

どのような人間に育ってほしいかについてP教諭は「将来育ってほしい人間像としては、芸術を鑑賞してアートが全てとつながっていることを理解してほしい。私はTOKのプレゼンテーションで、いかにアートが学際的で、他の全ての教科とつながりやすいか、アートと数学、理科、そして全てとつながることを示しました。アートは誰かとコミュニケーションするには最良の方法です。図で示して自分の言いたいことが示せます。正式なコミュニケーションの中でも有効で、ご存じの通り、アートは社会の中でとても大切な位置を占めていて、彼らには社会とつながって、広くアートを楽しんでほしい」と答えた。

G教諭は「バランスをとることのできる人間に育って欲しいです。IBというバランスとは、単に平均的であるという意味ではありません。自分が行おうとしていることを何が支え、誰が利益を得て不利益となるか。そのフォローはどの時点でなされ、結果、自分の行ったプロジェクトが社会にとって有効であるためのプランと実践のできるといった姿が望ましいです」と答えている。

美術の効果については表現手段や伝達手段としての美術の必要性が今後ますます求められること、個性や個人の尊重、多様な表現の可能性を学ぶのがまさに美術なのだという答えであった。また、育ってほしい人間像では、広い意味での芸術の理解者になってほしい、芸術を楽しんでほしい、というように芸術を愛する人になってほしいと答えている。これは豊かな情操を養うことを目指す日本の学習指導要領ともつながる。また、IB全体にも目を向けてバランスのとれる人、社会全体に対して有益なもの何かを考えられる人を挙げている。まさにIBの目指している人になってほしいということであろう。このように見ると、IBにおける美術教育は単なる作品制作ではないことがはっきりしてくる。そしてそれが十分生徒に伝わり教育的効果を生むためには教師自身がしっかりとIBの美術教育の立ち位置を自覚する必要があることが改めて確認できた。

⑩ ISSのシチュエーション

ここでは教師の解答の中から見られるISSという学校の現状についてである。P教諭はISSという環境が「興味深いシチュエーション」と答えている。何度も言っているように日本で最初の国公立の学校教育法1条校のIB認定校であるというように特殊な学校と言える。そこでやっている教育はP教諭にとっても「興味深い」活動なのであろう。

G教諭はIB、特にDP取得希望者がどうしても途中で編入した生徒が多くなることの問題点を指摘している。その原因の一つとして言語の壁をあげており、1年生から在籍している「生え抜きの」生徒がどうしてもDPをとれない現状があると指摘している。日本語デュアルDPも始まってはいるが、やはり、言語については少なくとも現在は壁になっていると言わざるを得ない。

⑪ IBを実施する上での規模

「ISSはIBをやるにはかなり大きな学校」とG教諭は捉えている。またG教諭のクラスは27名で日本の他の学校に比べると生徒数は少ないのであるがMYPをやるのなら20名ほどが適正であろうと感じている。であれば「あとの7名はどうしよう」ということになる。DPに至っては5年生(DP1年生)は17名であり、これは厳しい人数であろうと答えている。

⑫ 学習指導要領との関係

N教諭は「学習指導要領とIBの育てたいところは同じ」と述べている。日本の学習指導要領とIBの目標や目指す生徒像もほぼ一緒に評価のシステムや授業の展開を目指すところが違うので

はないか、としている。また、日本の学習指導要領も思考判断の方向に行っているようで日本も考えさせる方向に行っているのではないかと、つまり IB に近づいているのではないかという意見である。評価の観点も IB に近づいてきているようだと考えている。

G 教諭は日本の学習指導要領では表現と鑑賞を密接に関連させよ、という姿勢であるが、IB はそうではないのではないかと指摘している。特に、比較研究の課題では高度な内容が設定される上級レベルでは、自分の作品も比較の対照になるが、標準レベルでは作家作品のみを比較の対象にしていることをあげ、日本では当然自己の作品も比較する方が自然であり、その方が生徒もやりやすいのではないかと述べている。これは、IB が作品制作と鑑賞や作品研究といったものを別のもの（少なくとも分かれて考えるべきもの）と捉えているのではないかと述べている。日本の生徒たちを見た場合、表現と鑑賞を関連づけて課題に当たらせる方が慣れており、最終的な評価も高くなるはずではと指摘している。この点については IB と学習指導要領とに根本的な差異があるのかさらに見ていく必要がある。

⑬ その他

他には IB のウェブ上の情報発信装置である OCC や IB 教師のコミュニティーについても聞いた。また、各教科や教科以外で様々な学習法等を学ぶ ATL (Approaches To Learning=学習の方法) についても聞いた。ATL のねらいは「生徒が生涯にわたって学習を享受するために必要な自己認識やスキルを発達させること」であり、「コミュニケーション」「自己管理 (self-management)」など 5 つのカテゴリとさらに「協働 (collaboration)」など 10 のクラスターに分かれて示されている¹³。G 教諭は ATL の扱いについてどちらかというスキルなので基礎的なことであり、どの教科にもあてはまる部分がある。ISS の独自の授業である国際教養でも触れていると話している。ATL については日本の学習指導要領では表面的には触れていないので、この面についても研究していく必要がある。

4.4 教師に対するインタビューへの考察

今回インタビューした 3 名の教師は現在 ISS で美術の授業を担当しているが、簡単なプロフィールで触れたとおり、経歴がまったく異なっている。そして 3 名とも豊かな教職経験を持っておりそれぞれの立場から率直な意見を語ってくれた。このことは、本研究にとって大変有意義なことであった。

IB についての 3 名の見方は、当然のことながら異なっていることがわかった。P 教諭は米国人として米国の教育と比較しながら IB を見ている。P 教諭が知っている米国の美術教育と比較して IB は調査研究の比重が高いことを述べているが、これは日本の美術教育と IB の比較とも通じることであろう。印象的だったのは ISS のシチュエーションに興味を持っていることである。ISS というある意味では特殊な状況にある学校での IB プログラムの実施は確かに興味深い。OCC にあるレスンプラン等の活用について尋ねたとき、その活用よりもこの学校のよさを生かすためにカリキュラムを考えているという主旨の回答に P 教諭の ISS にかける思いを感じた。N 教諭は内地派遣で現在 ISS の授業を担当している。MYP に慣れない面を感じながら MYP について冷静に分析している様子を感じることができた。ルーブリックを活用する評価について、より一層妥当性を持って生徒の能力が表れるようなルーブリックの在り方を考えているとのことである。ルーブリックについては今回そのメリットデメリットを具体的に聞くことができたことは大きな収穫であった。また、重要概念やグローバルな文脈等 MYP が使用する独特の用語については、なかなか理解しづらい面が改めて確認できた。G 教諭は ISS1 年目ではあるが以前から IB については理解をしており、多くの貴重な話を聞くことができた。筆者は国内外の IB 認定校をこれまで調査してきたが、そこでの生徒の美術的な能力の高さに驚いたことが多々あった。しかし、今回の調査で、海外の IB 大規模校の中で本当に得意な生徒のみ美術を選択していることもあるという実態も聞くことができた。逆に ISS の DP クラスは美術が必修であり、美術を得意でない生徒も選択してくる。その場合、例えば海外でまったく美術教育を受けてこなかった生徒も DP を学ぶことになるのである。これは世界共通の国際規格としてみるとやはり難しい問題の一つであろう。そのような中で日本の美術教育の積み上げがかなり有効に働いているという話は、美術を必修教科とし

て義務教育に置いている日本の美術教育に対する位置づけを見直すこととなった。他にも IB プログラムにおける美術と TOK との関係がやはり深いこと、MYP と DP とのつながりから、DP だけ実施することはやはり難しく、MYP から行う必要性が IB を総合的に身に付けるという意味であること等が確認できたのは今回の研究の大きな成果であった。

5 総合的な考察

教師と生徒から直接話を聞くことができ IBMYP と DP のつながりの重要性が明らかになった。MYP と DP はどちらも IB のプログラムであるから、関係性、連続性があるように作られている。IB は必ずしも MYP と DP を連続して行わなければならないとはしていないが、今回見てきただけでも連続して行うことに IB の理念に沿った学習を効果的に行うということから、大きな意味があると思われる。その関係を図 1 に表す。

探究型概念学習は IB の学びの中心的なものである。コンテンツベースではなく、コンセプトベースの探究的な学びを美術はもちろんどの教科でも行う。そのときに教科内外での学際的な学びを通して真理はどこにあるかを生徒は追求していく。探究的な学びは MYP ではグローバルな文脈や探究の問いを設定しながら行われる。中学校の早い段階からグローバルな文脈、探究の問いなど IB の学習方法に慣れておくことは概念を理解するためには重要なことである。グローバルな文脈等を理解しなくても学習の内容自体はわかるので、そのまま MYP の授業は進行し生徒も表面的には困らない。しかし、本当に概念的な理解ができていないか、深いところまで理解ができるかとなると難しく、「何を問題にしているかわからない」ということになってしまう。そしてそれが全ての教科領域で起こるのである。であるから、教師も生徒もここ（単元や学校）で扱う概念とは何か、そもそもここ（単元や学校）では何を学ぶのか、を深く早い段階から考えていくことが大切だということがわかる。概念的な理解は決して簡単なことではない。どうしてもコンテンツに引っ張られたり、表面的な理解にとどまったりしてしまう。そのためにも教科内外における学際的な学びにより、教科の枠をこえ、より深い内容まで踏み込むことが大切になる。

そして DP に設定されている TOK が概念的学びのヒントになる。知識とは何か、私たちは知るということを、何を持って言えるのか、ということ深く考えていく。生徒の話でも美しさとは何だろう、私たちは本当に美術を理解しているのだろうか、など真剣に考えていることがわかる。TOK は IBDP の特徴でもあり、MYP であろうと IB を見ていくためには TOK とは何かを見ていくことはやはり必要である。

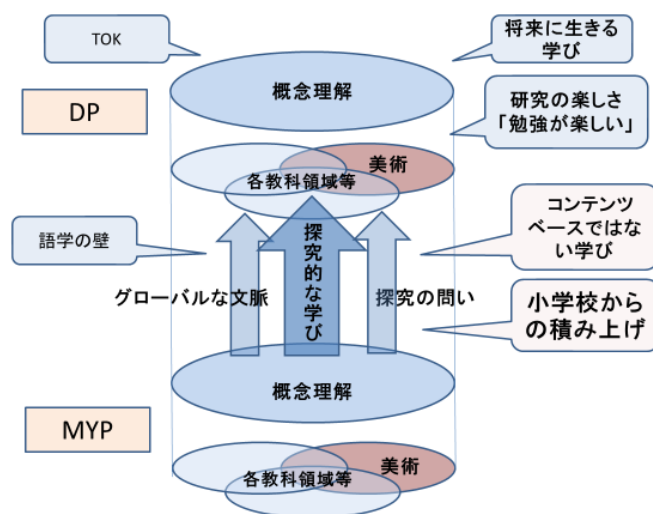


図 1 連続した概念的学び (小池作成)

また IB のマイナス面もいくつか明らかになった。MYP は言語に制限はないが、DP では日本語が大幅に OK になったとはいえやはり言語の壁はあるようである。IB の目的には国際な相互理解もあるため語学の習得は必要ではあるが、語学を苦手とする生徒にとっては壁となっていることは間違いない。DP では学習自体が高度になるため、学習内容に合うレベルの語学力を身に付けることはやはり並大抵のことではないことを生徒の話や授業参観等から感じ取った次第である。また、規模の問題であるが ISS は MYP でも 1 クラスは 27 人程度であり、日本の現状からすれば

ば少人数である。しかし、現状を聞くと決してそうではなく、MYP のプログラムを行うのであれば厳しい数字であるとのことである。であるなら、IB の学習のよさを日本の教育に応用することは現状では学級人数という物理的な面できわめて困難だという結論になる。このことは、これからの本研究の大きな課題である。また、DP の美術は実質 1 年半弱の間に最終発表の場所である展覧会を行わなければならない。つまり、DP がスタートする時点である程度の完成度を生徒に求められるシステムである。海外では美術の得意な生徒、いわゆる能力の高い生徒の選択が前提になっているのではないかと、このことであった。そうすると ISS のように必修である場合はどうなるのか、また、日本の美術教育では、どちらかと言えば情操面を重視しており、技能オンリーの指導ではない。このあたりも外部評価のある IB で考慮しなければならないことであった。

生徒は多様な表現が保証された IB の美術に興味を持ち、美術を通しての見方ができるようになったなど、授業の効果は大きいと言える。この授業の方針が生かせるシステムであることもこれからの IB と日本の美術教育の関係を考える上ではきわめて重要である。

6 おわりに

今回のインタビューで生徒や教師から話を聞くことができ、IB は単に教科の内容を教えるシステムではなく、より複雑なシステムで、複雑なパズルのようになっていると考えられる。つまり、コンテンツそのものでなく概念を文脈の中で生徒自身が研究しながら学んでいくのである。そのパズルのパーツ一つ一つを生徒はもちろん教師もしっかりと理解する必要がある。理解しなくてもなんとなくはできるのであるが、それでは IB が目指している探究的な学びの本質に到達しない。生徒が言っていた「勉強が楽しいと感じる。変な意味ではなく、大変だけど楽しい」「なんか最先端の研究をしているみたい」という言葉に IB のシステムが持つ力を感じた。また、DP のみを導入しても結果的には IB の本質を教師、生徒ともに理解できずに終わってしまうのではないかとこのことを改めて感じた。2 年弱という短い期間で行う DP は高度な内容であることが生徒の話からも実感を伴って伝わってきた。DP をしっかりと学ぶのであるならば MYP や PYP (Primary Years Programme = 初等教育プログラム) も積極的に導入していくことを考えていくべきである。IB のよさを日本の教育に取り入れるのであれば長いスパンで IB の教育システムを見ていく必要がある。

(資料)

教師に対するインタビューの内容をカテゴリー化した表である。データはセグメント化した言葉の根拠となるべきところ、研究の中で重要と思われる個所を聞き取った内容から切り取って表示した。

表 3 教師の回答

発言者	カテゴリ	コード	セグメント	データの一部
P	DP の特徴	目的	主な目的の一つは実験 (experimentation)だ	DP(アーツの特徴は)主な目的の一つは実験 (experimentation)だ。
P	DP の特徴	目的	アートは目的がある 目的を持つことそれを他者に伝えられることがとても大切だ	アートは目的があるということだ。目的を持つことそれを他者に伝えられることがとても大切だ。
G	MYP の特徴	授業内容	課題をこなすこと 思考の仕方を残す	あと思考の仕方を残しているかどうか、美術で言えばアートプロセスジャーナルに残しているかどうかだ。

G	MYP の特徴	授業内容	MYP のよい点 感性や情操を自分で構成できる 自分の思考として補っていく 理論だったプログラム プレゼンテーションが変わる	感性も大事にしていくんですけど、それをどう構築していくかということについて、自分で、構成できるような、そういう部分があるのでは。 意思として自分の思考として補っていくっていうところが MYP はいいところだと思う。 プレゼンテーションが変わる。インアウトが適切にできているかなっていうのがある。
G	MYP の特徴	授業内容	悪い点 いい子たちはどの教科でもいい グローバルな文脈等を理解できるかどうか できない子はできない 言語と思考の関係が構築できるか	今いいですよ、っていった生徒たちは多分どの教科でもいい。かなり学際的な部分のところが理解できているかどうかみたいなのが教科に響いてきちゃうだろうなというのが非常に感じている。 一番は言語と思考がどういう風に構築がちゃんとできるかというのがそこが結構大きい。
P	DP の特徴	授業内容	教師は生徒のガイド アイデアにぴったりの表現ができるようにサポート	教師は生徒のガイドをし、彼らを手助けする。
P	DP の特徴	授業内容	IB はより多くのリサーチがある。 自分が創造している課題の、他のアーティスト、他の種類の美術の実例を調べなければならない	(IB のアート教育と他のアメリカのアート教育との比較について)IB はより多くのリサーチがある。生徒は自分が今やっている、自分が創造している課題の、他のアーティスト、他の種類の美術の実例を調べなければならない。
N	MYP の特徴	授業計画	ユニットプランナーの作成	今すでにユニットプランナーを出せという指示が来ている。
N	MYP の特徴	授業計画	ユニットプランナーの作成 題材に引っ張られる	重要概念、関連概念、グローバルな文脈、をどうつなげていくかが大変だ。
P	DP の特徴	授業計画	IB のコアシラバス 目的を持って結びついている それぞれの大きなプロジェクトの中で、行われる 重み付けが違う	(IB のコアシラバスとは具体的には何か) 少し複雑だ。ビジュアルアーツインコンテクスト、ビジュアルアーツインメソッド、コミュニケーションインビジュアルアーツ、は違った目的を持って結びついている。
P	DP の特徴	授業計画	逆向き設計で計画する	私は逆向き設計で計画する。まず、創造するにはどうしたらいいか、と考える。
P	DP の特徴	授業計画	年間のプロジェクト数	・最終的な展示では4~7個の作品を展示する。数は生徒が選択できる。
P	DP の特徴	授業計画	プロジェクトのテーマ	(プロジェクトのテーマの決定は) ・シンプルから複雑なものへ。

N	MYP の特徴	評価 ルーブリック	ルーブリックの難しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・もうちょっとわかりやすい楽しめたことでも、分析できたらいいかなとか、評価の段階ではどう楽しめたかわかるから評価に入れちゃうこともある。 ・ルーブリックの文を見るときと深いものを求めている気はするが、そこまでなかなか示しきれずに結局いい評価、最高点まで付いてしまう。
N	MYP の特徴	評価 ルーブリック	ルーブリックの弊害 点を取るシステムが問題 考えたことを評価できることを明記する	考えたことを評価できることを明記できればだいぶ違うんじゃないかなと思う。
P	DP の特徴	評価 振り返り	フィードバック 次の作品をよりよくするために、変化する必要がある	自分自身の作品について語ることは、「私は次の作品をよりよくするために、変化する必要がある」と考えることができる。振り返ることはとても大切だ。
G	DP の特徴	評価 振り返り	探究学習の課題 リフレクションの中にインプ ループメントをどう入れて いくか	課題を言うと、振り返り、リフレクションの中に改善点インプルーブメントですねそこがどう一貫性を持って自分が見ることができるか伝えられるかどうか、説明できるかどうか、そのあたりがかなり大きいかなと思う
G	DP の特徴	評価 振り返り	アートの文脈で考える 美術自体が人文学的な研究が中心	美術自体が人文学的なその人が中心となるような研究が中心となってくるので、その意味ではもうつながっている。
P	DP の特徴	評価 校内のク ライテリア	校内のクライテリア	最終的なものに合うようにして、最後に矛盾が起きないようにしている。生徒が「何これ」とならないようにしている。
P	DP の特徴	評価	評価 生徒の全ての努力 (effort)を見るのが難しい 評価規準(criteria)に合わないことがある 評価規準が曖昧なとき ジャッジを揃える	<ul style="list-style-type: none"> ・難しいポイントの一つはプロジェクトの中で生徒の全ての努力(effort)を見ることだ。しかし、それは評価規準に合わないことがある。 ・他には評価規準が曖昧なときがある ・世界中の先生とジャッジをそろえないといけない。私はフェアにしようと思える。
G	MYP の特徴	評価 態 度	態度について、日本の小 学校との違い	証拠があるかどうかとかもつとと言うと態度的な部分が左右したりするところがあるので、どちらかというとか感情的な、(日本は)お行儀みたいなどところがあるから、アティチュードといっても資質・能力が入っているかって言うそうじゃない態度で響いてくるようなことが(日本では)多い。
N	MYP の特徴	評価	思考を評価する アイデアを決めたことをど こで評価するか	思考を評価するところがあり、複数の中から自分のアイデアを決めた、ということをどこで評価するかが難しい。

			帳尻合わせ	ただ最終的に帳尻合わせればいいやみたいなどころがある。
N	MYP の特徴	評価	回収の困難さ ワークシート	私はワークシート嫌い。おんなじフレームがすごい嫌いで美術なんだから好きなように描いたらいいじゃんと思う。落書きがあつたり、字がでっかかったりしてもいいだろうと。 その意味ではスケッチブックのジャーナルは革新的だと思う。
G	MYP の特徴	評価	エビデンスが重要	・証拠として、エビデンスがあるかどうか、が大きい。それがなければ評価できない。
G	MYP の特徴	評価	評価 エビデンスがある	いや、あれだけエビデンス残されたら、付け方は簡単であろう。 何を含めているかをちゃんと伝わるように、書いているかどうか非常に左右される、
G	MYP の特徴	評価	説明できる規準の作成	(うまくルーブリックができれば評価もスムーズにできる) 後藤: その関係性が強いかなとは思ふ。
N	ISS	評価	DP ではない一般 6 年生評価規準は 3 つ ・分析と探究・創造と表現・芸術への態度	(一般の 6 年生は) MYP を経てきている子供たちなので、きちっと評価観点を示して、観点が 3 つあって、それでやっている。 ・分析と探究, 創造と表現, 芸術への態度の 3 観点だ。
N	ISS	評価	DP ではない一般 6 年生評価規準	(DP 以外の ISS の評価規準は学習指導要領に合わないところはあるか) ・技術面がちょっとないかと、探究に技術面を入れるのか、表現に技術面を入れるのがちょっと難しい。
G	DP の特徴	評価	外部評価	懸念しているのは外部評価だ。
G	DP の特徴	評価	日本の指導要領と海外の評価の実例	日本の中では特徴があつてこれ面白いよね、っていう状況ではあるが、DP の部分から見たときには、かなりの子がスキルとかで点を落とされるのではと思う。
N	MYP の特徴	概念理解	概念が難しい	概念がどうのと言うところが難しい。そこが大きな違いになるかもしれない。
N	MYP の特徴	概念理解	重要概念, 探究課題が難しい	(探究の問いに付いては) 私が重要概念にポイントを置いた指導ができてくるかって言うとちょっと、まだ、自信がない。
N	MYP の特徴	概念理解	MYP は概念などの縛りが多い	(MYP は) ちょっと縛りは多いかなと感じている。これ(コンセプトとかコンテキスト=文脈とか)が理解して作っていけばちゃんと指導にも向かえると思う

				が、なれるのが大変だ。
G	MYP の特徴	概念理解	重要概念がないまま話をしても根拠のない授業になる	でもその重要概念がないままで話をしても、自分に根拠がない授業をやっているかな、ってだいたいやっている感じがするので、
G	MYP の特徴	概念理解	造形的な視点を持って概念を考える	造形をそれにしていくかということを考えた方がより創造的かなというのは思ったので、そんな話をする。
G	MYP の特徴	概念理解	深いところまで考えさせる考えさせる癖	あとは、DP の話が出てくるが、一問一答の課題を出して DP について行けるかということだが、自分で、探究を研究ができるかどうか、というところと弱いのでは。 考えさせる癖を付けていかなければならない。
G	DP の特徴	概念理解	MYP の重要概念との関係今までやってきたことを示す	後はやはり、MYP と一緒にやっている学校だからこそ、パッと目にしますよね。ポスターだったりとか、そんなことも大事なと思う。
N	MYP の特徴	探究の問い	探究の問い わかりにくい英語が先にある	(MYP に戻って探究的な問い、概念的な問い、議論可能な問い、事実を聞く問い) 今見本としてやっているものはわかりにくい。たぶん英語がさきにあるんだと。 この作品の背景について何があるんだろう、ということまでは調べられない子が多い。
N	MYP の特徴	探究の問い	問いは問いで終わっちゃってリンクしない	調査が不十分だったり自分の考察が不十分だったりすると、自分の発想とつながらないまま活動に入って発想としては薄くなってしまふ。問いは問いで終わっちゃってリンクしないという子が結構いる。
G	MYP の特徴	探究の問い	探究の問い 概念をどう共有するか 実感がある問い	問いを出したときに、ああそういうことね、この面白さって言うのはそういうことねって生徒がわかっもらえる導入を組んでいるかどうか、
G	MYP の特徴	探究の問い	探究の問い 学ぶものは概念でコンテンツではない TOK から考える	(先ほどの問い、議論的な問いとか、概念的な問いを作ることは大変か) 問いを作ることは個人的には大変ではない。やっぱり、学ぶものが概念なので、コンテンツではないので、そこから離れればいくらでも作れると思う。
N	MYP の特徴	グローバルな文脈	グローバルな文脈がわかりにくい 課題内容が先に来る	(配布した授業プランの概念やグローバルな文脈を示して) 難しい。どうしても課題内容が先に出てきてしまふ。文化的表現と自己表現が美しくなければならぬかという、きれいじゃないものもあるよね、美しさの概念てひとによってちがうので、うーんという感じで、

G	MYP の特徴	グローバルな文脈	グローバルな文脈 グローバルな文脈を自分で選んでディベイトブルにするとしたら 1年生でそれを学ばないと、もうどうでもよくなる	グローバルな文脈を自分で選んでディベイトブルにするとしたらどうなの、というようなことを考えさせると、アイデンティティーと関係性が出てきて。(グローバルな文脈があって、こういう文脈で学んだぞみたいな)。 それ生徒は知っている。1年生でそれを学ばないと、もうどうでもよくなる。やらなくてもできるから、だから大事なんじゃないかと思う。 多分文脈と呼ばれるところの一般的な定義とかワードとかいうものではなく、文脈の中で何がアイデンティティーと関係性なのかとか、個人的表現と文化的表現なのかというその、そこが大きい。
P	DP の特徴	展覧会	スクールトリップ 一般の人に対してどのように自分の考えを示すかとても重要なこと	私たちは展示についてスクールトリップに行った。一般の人に対してどのように自分の考えを示すかとても重要なことだと思う。
P	DP の特徴	展覧会	これは私もできる。これをやってみよう 彼らとアートとつながった	博物館で有名な芸術作品を見るのと同時に、同世代の高校生の作品も見た。「これは面白い、これは私もできる。これをやってみよう」と感じている。彼らとアートとつながったと思う。
P	DP の特徴	展覧会	展覧会の問題点	今年は8人なので問題はないが、来年は17人なのでスペース的に問題
G	DP の特徴	展覧会	展覧会の問題点	・展覧会は概要はガイドに書いてある。あとはどう展示していくのかというのはできている。
G	DP の特徴	展覧会	動機付けとしての展覧会	5年生には、来年自分たちがやるというような、それこそ、前期生にはあこがれになってほしいというような、指針になってほしいし、みんなが見られたいと思う。
G	IB 全体	生徒の将来像	バランスのとれる人間	バランスをとることのできる人間に育てて欲しいです。 自分の行ったプロジェクトが社会にとって有効であるためのプランと実践のできるといった姿が望ましいです。
G	IB 全体	生徒の将来像	インディビジュアルなものの個性の確立と認め合い	そのような姿へと成長するために、美術は欠かせません。視覚伝達表現を生活や仕事の中で使いこなすことができるのも大切なことです。そして、私の視点ではインディヴィジュアルなもの、個性の確立と認め合いができるのが美術の時間ではないかと考えています。
P	DP の特徴	生徒の将来像	芸術のスキル職業についても、自分の考えを視覚的に示すことを求められたりする	私たちは芸術のスキルをずっと使うことができると思う。職業についても、自分の考えを視覚的に示すことを求められたりする。ですから、それはとても大切なことだと考えています。

P	DP の特徴	生徒の将来像	美術がどのように役立つか 視覚的な思考 育てほしい人間像 アートが全てとつながっている アートを楽しむ	(美術は彼らの将来にどのように役に立つと思うか) 将来, 彼らがどのような職業に就くかにかかわらず, 視覚的に自分たちの考えを表してプレゼンテーションできる 芸術を鑑賞してアートが全てとつながっていることを理解してほしい 彼らには社会とつながって, 広くアートを楽しんでほしい。
P	DP の特徴	シチュエーション	興味深いシチュエーション	私たちはとても興味深いシチュエーションにいる。この生徒の要素や環境, 場所やバックグラウンドはとても興味深い。
G	MYP の特徴	規模	大きな学校で MYP をやる 難しさ 適性は 20 人くらい	(なるほど, それがある意味特徴だと) あと, うちの学校は MYP としては大きい学校だと思う。 じゃあ MYP でほんとにやれと言われたら, 20 人くらい(が適正じゃないかと)。
G	DP の特徴	規模	日本の学びの積み上げが大きい	, とかくビジュアルアーツに関しては日本の学びの積み上げは意外と大きい。 ・自分としてはいろいろできて楽しいが, でも授業をするのはどうかということなきにしもあらずだ。そこが他の教科とは違うと思う。
N	MYP の特徴	学習指導要領との関係	MYP と学習指導要領 育てたいところは同じ	(MYP と学習指導要領の違い) ・育てたいところは一緒かなと思う。目標は結構似ていると思う。 ・今日本の文科省のも思考判断の方に向いているんですけどそれよりもっと考えさせる方に向いているんじゃないかと思う。
N	MYP の特徴	学習指導要領との関係	学習指導要領との対応 ねらいは目標に合致 IB によってきている	(学習指導要領との対応の面では) 対応はしていると思う。ねらいは目標には合致していると思うので, 美術に親しむとか創造するとか鑑賞するとか文化的なものに触れるとか, 到着点は一緒と。 ・(今度学習指導要領が変わって 3 観点になる)でも 3 観点もこれに近い。逆に IB の方によってきているようだ。知識技能と, 思考力判断力と, 態度と。
G	DP の特徴	学習指導要領との関係	日本の表現と鑑賞との関係 コンパレティブスタディーが自分の作品と関わってくる ことの捉え方	あとハイヤーレベルになるとコンパレティブスタディーが自分の作品と関わってくるようになってくる。でも正直言ってその方がやりやすい。ハイヤーの方が生徒の思考にあっているのだからやりやすい。
G	DP の特徴	学習指導要領との関係	日本の表現と鑑賞との関係	日本で言う鑑賞と表現, 日本のカリキュラム, 指導要領の部分で言うとみんなが当然のようにやって

		関係		きた表現と鑑賞の関わりから言うとどうなのかなと、
G	IB 全体	特徴	IB プログラムの印象 1 年生で慣れること	(IB プログラムについての感想) IB 全体としては、生徒が最初の 1 年生で全てにおいて慣れる必要がある
P	IB 全体	コミュニティー	IB のコミュニティーは全て の人が問題を共有	(IB ティーチャーのコミュニティーを活用しているか) 。IB のコミュニティーは全ての人が問題を共有しているのがよいと思う。
P	IB 全体	OCC	OCC の活用、全てのユニットや学期のことを考えなければいけない	(OCC を活用するか。ユニットのサンプルがあると思うが) はい。IB の人たちがやっているととても助けられる。。私たちはコンセプトを持っています。それを得るのがプロジェクトだ。
G	MYP の特徴	ATL	アプローチ TO ラーニング (approach to learning) どちらかというスキル	ATL は授業でも重視はしている教科はあるかなと思う。特に英語なんかは重視しているようだ。基本的にはどの教科も当てはまる部分はすごく強い。ATL もどちらかというスキルなので、基礎と言えば基礎のことを言っている。

(謝辞)

・本研究を行うに当たり東京学芸大学附属国際中等教育学校の管理職の先生方、美術科担当の先生方、2017 年度 6 年生の生徒の皆様にご多大なるご協力をいただきました。感謝申し上げます。

・平成 27～29 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C））（一般）「国際バカロレアにおける美術教育—中等課程を中心として—」課題番号 15K04413）の助成を受けている。

¹ http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1307999.htm 2017 年 9 月 16 日接続。直下の日本再興戦略についても文科省のサイトを参照。

² 制度としては美術も日本語で実施してよいことになっているが、ISS では英語で行っている。

³ 質的研究の方法については、佐藤 郁哉『QDA ソフトを活用する実践的データ分析入門』新曜社、2008 等を参考にした。

⁴ P 教諭によると、1 つ目のプロジェクトは express yourself (自分自身のポートレート)、2 つ目は culture in your background (自分自身を発見する) である。

⁵ International Baccalaureate Organization, 2014, 『知の理論 (TOK) 指導の手引き』(原題 Theory of knowledge guide), p. 3. 直後の引用も同所から。

⁶ IB では 10 の学習者像 learner profile が掲げられている

⁷ 「探究の問い」や「グローバルな文脈」等この後に記す各種 IB の用語については、小池研二、2016, 「国際バカロレア中等教育プログラムを生かした美術科教育の実践研究」, 『美術教育学研究』49 号, pp.161-168 等参照

⁸ 学習している内容が自分たちの生きている社会の問題として捉えられたときに関心や意欲を持つというスタンスで、アイデンティティーと関係性 (Identities and relationships) 公正性と発展 (Fairness and development), グローバル化と持続可能性 (Globalization and sustainability), 個人的表現と文化的表現 (Personal and cultural expression) 等 6 個が設定されている。

⁹ MYP は教科横断的な 16 個の重要概念と、各教科で扱うべき関連概念 (美術では 12 個) が公式に示されている。

¹⁰ International Baccalaureate Organization 『「美術」指導の手引き』(原題 “Visual arts guide”) International Baccalaureate Organization, 2016, p.20 等

¹¹ International Baccalaureate Organization, 2016, 『中等教育プログラム MYP: 原則から実践へ』(原題 MYP: From principles into practice), p.74

¹² 同, P.23

¹³ 同, P.26